

「比企地方の城跡・館跡めぐり」

第22期 歴史・郷土学部 課題研究A班



メンバー紹介 (◎リーダー、○サブリーダー) 13名

後列左より

齋藤康子、江藤 精二、本間 周子、内田 洋子、遠山美恵子、飯野登美子、○高垣 直澄
前列左より

幕田 純、高橋 孝子、関根 孝子、◎泉 晴樹、新井三千代、北堀 彰男

目 次

1. はじめに
2. 「比企地方の城跡・館跡めぐり」テーマ選定
3. 「比企地方の城跡・館跡めぐり」の活動記録
4. 城跡・館跡を訪ねて
 - (1)松山城跡 (2)菅谷館跡 (3)腰越城跡 (4)安戸城跡 (5)杉山城跡 (6)青鳥城跡
 - (7)熊井城跡 (8)養竹院 (9)山田城跡 (10)小倉城跡
5. おわりに (参考資料・施設・ご協力いただいた方)

1. はじめに

わたしたち(東松山きらめき市民大学)22期歴史・郷土学部A班は、「郷土の歴史を識る」を課題とし、比企地方に点在する中世の城館跡を探索することにした。

比企は古の武蔵国比企郡である。令和4年NHKの大河ドラマ『鎌倉殿の13人』で比企能員や畠山重忠が一時脚光を浴びたが、全国的には「比企地方」という地名を知る人はほとんどいない。比企地方は今も昔も首都圏外に鄙の地を保っている。

(1) 当地における歴史的状況

北武蔵に位置する比企地方は、古代より「東エビスの国」として中央政権の蚊帳の外におかれてきた。中世となり京都に足利幕府が開府され、東国(関東)支配として鎌倉府が設置された(1352年鎌倉公方足利基氏、関東管領上杉氏)。3代将軍義満の頃までは比較的平穏に推移していたが、15世紀に入ると将軍家と鎌倉府の間に亀裂が生じて鎌倉府が分裂(古河公方・堀越公方)する。一方、鎌倉公方を補佐する立場の上杉氏も関東管領の職を争って分裂(山内上杉・扇谷上杉)してしまう。その結果関東とりわけ武蔵はこの四者の草刈り場となり、京都の応仁の乱(1467~)に先んじていつ果てるともわからない戦国時代に突入していったのである。

やがて武蔵の全土(含比企地方)が小田原北条氏の領土となるが、ついには天正18年(1590)豊臣秀吉軍によって鉢形城が陥落し、牙城小田原城が陥落して東国の戦国時代は終焉する。その間、比企地方を治めていたのは扇谷上杉家臣であった上田氏が、主君を3度も替える(上杉朝定→北条氏康→上杉謙信→北条氏康)という弱小領主ならではの悲哀を甘受せざるをえなかつたと云える。

以上ざっくりと当地の状況を述べたが、歴史の教科書には載らずとも、絶えず有力大名のはざまで翻弄され続けてきたのである。戦火は人々の暮らしを破壊するのみならず文物など歴史の証まで抹殺する。とりわけ天正18年(1590)の戦乱(豊臣秀吉軍の小田原攻め)による文物の消失が大きかったと言われている。したがって、比企地方の中世の歴史は深い霧のベールに包まれている。

さて比企地方の中世以降の「城館跡」は69カ所を数える(埼玉県立嵐山史跡の博物館)という。今回わたしたち13名は、比企地方の代表的な中世の城館跡とされる10カ所に限定して探訪・観察することとした。尚、探訪先10カ所選定については、「武蔵国城館カード」(埼玉県立嵐山史跡の博物館)によった。

(2) 探訪・研究の構え

わたしたちは全員専門知識を持たない素人集団である。しかし素人には素人の強みもある。それは先入観に毒されていないことだ。だから学習することは勿論だが、素直に直接自分の目で観、証拠のない風評・伝説などにも耳を傾けたい。そして考えよう。「観る・聴く・考える」まるで小学生なみだが、なんといっても万事これが基本であり原点なのだから。そして、楽しむ事である。楽しみながら学ぶ、これが「生涯学習」の理念であろうと考える。新しい発見などなくてもいい。みんなで「郷土」の歴史に触れ郷土愛を育むことができれば無上の喜びとするものである。

さあ出発しよう！

2. 「比企地方の城跡・館跡めぐり」テーマ選定

昨今のお城ブームの中で、数々の城郭に関するテレビ番組が放映されている。「日本最強の城スペシャル」「絶対行きたくなる！ニッポン不滅の名城スペシャル」等々。そのほとんどは天正4年(1576)安土城以降の近世城郭である。

私達の住む比企地方にも数多くの城跡、館跡が残されている。しかし、見ごたえのある天守、門、堀や石垣が残されている訳でなく、ほとんど空堀、土塁、郭跡と言ったものであり、お城ブームの派手さはない。間近に遺跡・遺構を見ると、なぜそこに城や館が造られたのか、どのような役割をもっていたのか、伝説・風評はどのようなものが残されているのか、さらには地域に住む人々の生活はどのようなものであったのか、等々興味は尽きない。

私達はその中の代表的な10ヵ所について調べてみることにした。城・館の基本的な解説書だけでなく、直接自分たちの目で観、感じた事を中心にまとめてみることにした。

3. 「比企地方の城跡・館跡めぐり」の活動記録

(1) 課題研究で訪ねた城館跡一覧



城館跡	形態	所在地	遺構・遺物	標高(比高)	史跡指定
松山城跡	平山城	吉見町南吉見城山	堀・土塁	60m(40m)	国指定
菅谷館跡	平城	嵐山町菅谷城	堀・土塁	57m(0m)	国指定
腰越城跡	山城	小川町腰越南城山	堀・土塁	215m(100m)	県指定
安戸城跡	山城	東秩父村安戸城山	堀・土塁	260m(105m)	—
杉山城跡	山城	嵐山町杉山雁城	堀・土塁	95m(42m)	国指定
青鳥城跡	平城	東松山市石橋城山	堀・土塁	40m(8m)	県指定
熊井城跡	平山城	鳩山町熊井城	堀	—	—
養竹院	陣屋	川島町表	水堀	—	—
山田城跡	平山城	滑川町下山田城山	堀・土塁	62m(23m)	—
小倉城跡	山城	ときがわ町田黒城山	堀・土塁	124m(70m)	国指定

(2) 活動記録

回	月 日	実 施 時 間	内 容	場 所
1	03/12(水)	10:00～11:00	テーマ検討・スケジュール検討・役割決定	研修室 1
2	03/12(水)	11:00～12:00	城館跡実査(松山城跡、龍性院)	現地
3	03/25(金)	09:00～16:00	城館跡実査(安戸城跡、腰越城跡、淨蓮寺)	現地
4	04/06(日)	09:00～15:30	城館跡実査(杉山城跡、菅谷館跡)	現地
5	04/19(土)	09:00～15:30	城館跡実査(養竹院、廣徳寺、青鳥城跡)	現地
6	04/24(木)	15:00～15:30	全体スケジュール修正	研修室 1
7	05/07(水)	09:00～15:00	城館跡実査(熊井城跡、小倉城跡、妙光寺、山田城跡)	現地
8	05/09(金)	09:30～12:00	菅谷館跡勉強会	現地
9	05/22(木)	15:00～15:30	各城館跡の研究(各城郭担当毎)	研修室 1
10	05/29(木)	10:30～15:00	各城館跡の研究(各城郭担当毎)	講堂
11	05/30(金)	14:00～17:00	松山城跡勉強会 (講師 歴史スポット探究会様)	研修室 3
12	06/07(土)	10:00～12:00	実査(成覚山平澤寺、白山神社)	現地
13	06/19(木)	13:30～15:00	各城館跡の研究(各城郭担当)	講堂
14	07/03(木)	10:30～15:00	各城館跡の研究(各城郭担当)	講堂
15	07/10(木)	11:00～12:00	各城館跡の研究(各城郭担当)	研修室 1
16	07/16(水)	09:30～10:30	実査(鳩山町多世代活動センター)	現地
17	07/17(木)	11:00～12:00	各城館跡の研究(各城郭まとめ)	研修室 1
18	07/24(木)	11:00～12:00	各城館跡の研究(各城郭まとめ)	研修室 1
19	07/31(木)	10:00～12:00	課題研究報告書 各城郭担当毎作成	研修室 1
20	08/07(木)	10:00～12:00	課題研究報告書 各城郭担当毎作成	研修室 1
21	08/21(木)	10:00～12:00	課題研究報告書 各城郭担当毎作成	研修室 1
22	08/28(木)	10:00～12:00	課題研究報告書 各城郭担当毎作成	研修室 1
23	09/04(木)	10:30～15:00	課題研究報告書作成	研修室 1
24	09/16(火)	11:00～12:00	課題研究報告書作成	研修室 1
25	09/26(金)	11:00～12:00	課題研究報告書読み合わせ、修正	研修室 1
26	09/30(火)	11:00～12:00	課題研究報告書読み合わせ、修正	研修室 1
27	10/02(木)	10:00～15:00	課題研究報告書読み合わせ、修正 午後 集合写真撮影 (杉山城跡)	講堂 現地
28	10/10(金)	13:50～14:10	課題研究報告書 添付資料再確認	講堂

4. 城跡・館跡を訪ねて

(1) 松山城跡

①立地と縄張り

松山城は吉見丘陵の南端に位置する。丘陵の西側を流れる市野川が古くは丘陵の南端で流れを大きく東に変えていたので、それはあたかも松山城の外堀の呈を成していた。天然の要害といわれた所以である。

城郭域の面積は概算



30万m²。眼下に市野川を望む山頂の本郭から東方に二の郭・三の郭・四の郭が連郭式に並び、その北側を固めるように多くの郭が配置されている。また、城郭の出入り口(大手・搦め手)は確証が得られなかった。

城郭域の北東近くに「根古屋」と呼ばれる地域がある。これは城兵の寝泊まりの区域だったと思われる。

②沿革

築城時については諸説あるが、現存の城郭の構えは明らかに戦国期のものであり、関東の勢力が四分五裂する享徳の乱(1455)以後と考えたい。武藏国は太田道灌らの働きにより扇谷上杉の領土となっていたが、北の上野から山内上杉、東から古河公方が絶えず侵攻の機会を狙っており、松山城



は防衛の最前線を担っていたといえる。さらには16世紀に入ると小田原の後北条氏が伸張して、上杉謙信・武田信玄・北条氏康らによる戦国絵巻が繰り広げられたが、その渦中にあったのが松山城だったのだ。

その戦国絵巻を制したのは後北条氏だったが、天正18年(1590)官軍(豊臣秀吉)の圧倒的な兵力の前に松山城は無血開城となつた。

なお徳川の天下となり、「一国一城令」を待たずに慶長6年(1601)廃城となる。

③松山城にまつわる話

ア 松山風流歌合戦

天文6年(1537)包囲された松山城の難波田弾正憲重が、搦め手門から乗馬で出てきたが、戦わずに引き返そうとするのを見た後北条方の中山主膳が、

「あしからじ よかれとてこそ 戦はめ など難波田の 崩れゆくなん」

(主君のためによかれと戦ったのではないか、何故それなのに難波田弾正憲重ほどの名のある者が逃げるのか)と和歌でからかった。

それに対して、難波田弾正憲重は、

「君おきて あだし心を 我もたば 末の松山 波もこえなむ」

(幼い主君を置いて自分が死ねば、しまいには松山は荒波の中に呑まれてしまうであろう、そういうわけにはいかないのだ)

と和歌で答えた。但し、この和歌は「古今和歌集」からの引用である。武士である難波田弾正憲重がとっさに和歌で答えるとは学識の高さを感じた。

イ 軍用犬

太田資正は犬好きで、居城である岩付城と属城としていた松山城との二か所に犬を飼っていた。その犬達を岩付城と松山城との間で行ったり来たりさせ、「何かあつたら犬を放せ」と言い置いた。そして、松山城が北条氏に攻撃されそうになった時に、家臣たちは城中の犬の首に資正への書状が収められた竹筒を付け解放した。犬達は敵の包囲網を突破し、岩付城へたどり着き、資正の援軍が来たということである。これが軍用犬の始まりだともいわれている。

当時の犬は、柴犬であろう。愛嬌があり忠誠心も強く必死で手紙を届けたことと思われる。けなげな犬達の存在も忘れてはならない。

ウ 百足原の水

松山城の南方の百足原に二子稻荷があり、その御神木の下から湧水が出ていて「お茶の水」と呼ばれていた。この水こそ松山城兵にとって命の水であった。北条勢が井戸に毒物を投げ込み水が飲めなくなってしまった。この時、難波田弾正憲重がその水を家来に汲ませに行かせた。また、軍馬を高台に出し白米を馬にかけ、水があるように見せかけた。ある日、老婆がそのことを巡回中の北条の侍に言ってしまい、城は落ちてしまったということである。

この水は、現在の神明会館脇の二尾稻荷神社の南にある場所から湧き出ていた水であり、その水はおいしいお茶ができるといわれていた。これに因んで御茶山と町名になったと伝わっている。残念ながら埋め立てられて平地になっているが、下方に水が流れ出ている様子が見られた。この水は当時とても貴重なものであったと感じられた。

④城跡巡り

東松山市から東に向かい、市野川橋にさしかかると丘陵が見えてくる。左手に吉見百穴、右手に木々が生い茂る松山城跡が迎えてくれる。交通量の多い道路に沿って、そこだけが別の世界を感じさせてくれる。北側の急峻な搦め手門の近く

には、松山城主が代々護持していたと伝わる岩室觀音がある。城が落城したことにもない焼失したが、現在は再建されたものが建っている。東側の虎口は根古屋といわれる地区で、城を守る足軽たちの住まいに通じている。城の南、西、北の三方は市野川に囲まれ、荒々しく削り取られた急な崖になっていて、要害の地にある。

このように、地理的にも北武藏の防衛の要衝であった城といえる。

⑤考察 天正庚寅松山合戦図の疑問

江戸時代に作成されたという天正庚寅松山合戦図は、天正 18 年(1590)の松山城の合戦の陣取りを示している。これによれば、松山城は 5 千の城兵で 7 万の豊臣軍と対峙したことになっているが、はなはだ疑問である。

以下疑問を列記する。

ア 日付が入っていない。

イ 松山城に城兵 5 千は物理的に不可能(実施観察済)。

ウ 城主上田氏は小田原籠城につき不在のはず。

エ 寄せ手(豊臣北方軍)は上杉景勝・前田利家を総大将として真田幸村、大谷刑部、直江兼続ら錚々たるメンバー総勢 7 万人となっているが、しかしその時北方軍は鉢形城を囲んでおり(5 月 14 日～6 月 14 日)、松山城陥落の 5 月 22 日に北方軍の包囲はありえない。

オ 寄せ手の陣の配置である。前田利家は大谷地区、真田幸村は原地区、大谷刑部は野本地区、上杉景勝は古郡地区、直江兼続は今泉地区、そして吉見の久米田や和名まで陣を張ったことになっているが、荒唐無稽といえる。

カ 大谷刑部は豊臣秀吉政権での「五奉行」ではないし、石田三成とともに忍城攻略戦(6 月 5 日～7 月 17 日)に従軍しているから此処にいるはずがない。

キ さらに 6 月 23 日八王子城攻略で前田利家配下に松山城兵 3 千が入っていたという説がある。

以上のことから、松山城は 5 月 22 日に戦わずして北方軍大将前田利家に投降助命嘆願のうえ配下になったということだろう。また、上田氏は過去 3 回主君を替えているから「寝返り」はさほど不思議ではないと考えられる。従って、この「合戦図」は後世の創作(江戸時代)と考えられる。

また、「妙昌寺は鎌倉時代の創建以来ずっと青鳥城のそばにあったのだが、天正 18 年(1590)戦火を避けて現在地に移した。結果として戦火はなかったらしいのですがね」との村井住職の談話がある。

以上から推察して、松山城攻防戦はなかったと思料する。なお、上記を裏付けるものとして、ときがわ町「前田家先祖書由緒之覧」がある。

(2) 菅谷館跡

①立地・沿革

菅谷館跡は西側に都幾川・楓川の合流点を見下ろす高台にある。現在の遺構は

明らかに戦国時代のものだが、原初は「吾妻鏡」の記事などから秩父平氏畠山一族の居館だったと考えられる(後述)。

その後、戦国期に入り長享の乱(1487～1505)では、山内上杉・太田資康 vs 扇谷上杉・長尾氏・古河公方の抗争が展開された。とりわけ長享2年(1488)の須賀谷原の合戦は熾烈を極めて、死者700、馬数百頭が死んだとされる。この戦いで菅谷館がどのような役割を演じたかはわからないが、その後、武蔵国を制した後北条氏が現在の遺構を造ったものと思われる。

なお、城内の発掘調査は未だほとんど行われておらず、したがって、人々が注目し期待する鎌倉時代の遺構・遺物(畠山重忠に関するもの)は確認されていない。

昭和48年5月に鎌倉時代の代表的な武蔵武士の館に起源をもつ中世城郭の遺跡として国指定となり、平成20年に比企城館跡群菅谷館跡と名称が変更された。

②縄張りと遺構

菅谷城は、複郭式の平城で総面積13万m²(東京ドーム約3個分)あり戦国時代の築城技法を随所に見ることができる。館跡の西側は深い浸食谷があり外堀の役割をはたしている。本郭を中心に北側に二の郭・三の郭・西の郭・南の郭が配置され、それぞれの郭は深い堀と高い土塁(約3m)によって囲まれている。

また、郭の出入口である虎口の周辺が、防衛上重要な部分では横矢ができるよう土塁に折を付けたり出枡形(凸上の張り出し)の土塁を設けるなどの工夫がみられる。

③畠山重忠と周辺散歩

城内二の郭の土塁上に畠山重忠像がある。これは昭和4年(1929)に建てられたもので、竹筋コンクリート製となっている。「武士の中の武士」と称えられた鎌倉時代のスーパーヒーロー畠山重忠については、NHKの大河ドラマ『鎌倉殿の13人』でも大きく脚光を浴びており改めてここで説明する必要はないだろう。その重忠が悲劇の死地二俣川(現横浜市)に向かうときに、出発した場所が此処「菅谷館」だったとなっているのである。

菅谷館から東に1km足らずの処にちょっと神さびた菅谷神社がある。



そこの祭神の一柱に「畠山重忠命」を見つけた。

また、菅谷館の北 2km 程の処に成覚山平澤寺がある。「吾妻鏡」にも出てくる古刹で、須賀谷原の合戦では太田資康が陣を敷いたと伝わる。また、境内から「久安 4 年(1149) 平朝臣滋縄」銘の経筒が出土している。これは、秩父平氏畠山重綱(重忠の曾祖父のことだ。さすれば、重忠もこの寺にはちよくちよく訪れていたに相違ない。

さて最近聞いた話だが、この寺に若い頃から毎日欠かさず参拝していたご老人がいた。このご老人が亡くなった日に、白装束でお寺に向かうご老人の姿を見たという近所の住人が数人いたという。この話に感じた住職が「成覚院慈徳崇保居士位」の戒名を贈ったということだ。このご老人は熱心に畠山一族を供養していたものらしい。

④見どころ

館跡全体は 30~40 分で見て回ることができる。案内図・説明板も豊富で気楽に見学することができる。さらにボランティアによるガイドツアーも用意されており、三の郭の搦手門跡、正坫門跡の築土壘、建物跡、三の郭～西の郭の木橋、二の郭の畠山重忠像、本郭の出枡形土壘、生門跡などが必見ポイントとなる。

(3) 腰越城跡

①沿革

腰越城や安戸城一帯は松山城主上田氏の本拠であり、戦略的にきわめて有利な地勢であった。築城年代は定かではないが、松山城主上田氏によって構築されたと推測され、上田氏の重臣山田氏が城主をつとめ、上田氏にとって重要な城であったとされる。上田氏の領地の北端に位置し、領界の守備を守る拠点の城であったようである。「関八州古戦録」には天文 15 年(1546)の川越合戦で北条氏に惨敗した際、扇谷上杉氏の家臣であった上田氏が安戸の砦(腰越城)に退去したと記されている。上田氏は松山城攻防退路を常にこの地に求め、再来の機会をうかがつたようである。

②立地と縄張り

腰越城は、小川町と東秩父村の境に位置する官の倉山から南に延びる丘陵尾根の先端部にあり、その地形は東秩父村への入り口を遮断するかのようにも見える。しかも腰越城の真下を槐川が大きく U 字形に蛇行して丘陵の裾を削り、そのために丘陵の東と西は急峻な断崖になっている。まさに天然の要害といえる。

腰越城は標高 215m、比高 100m の



山城である。本郭の南傾斜面と南西側の尾根筋に大小 17 余りの郭が配置されている。

城は本郭を山頂におき、西に続く尾根上に郭が連続して配置されている。また、虎口の前に小さな郭を設け進路を 90 度曲げていたり、おとり虎口、隠虎口を巧みに組み合わせた虎口の作り方、あるいは何本もの堅堀が設けられているなど、登城ルートが極めて技巧的につくられているのが特徴のようであるが、我々は堅堀の一部は確認できた。

③周辺散歩

本郭跡からは小川の町や東秩父村安戸が見渡せる。



現在城のある山の南側に、同じくらいの高さの山がかつてあり、あわせて城山とよばれていたという。しかし、大正期以降大規模な石灰岩採掘が行われ、大きく崩されてしまった。山麓には、昔城山に仕えた侍達の寝る小屋があったことから地名となったと伝えられる根小屋という地名が残っている。

西には上田氏の本拠である安戸があり、上田氏の菩提寺である浄蓮寺がある。安戸には山田氏の屋敷跡や氏神の山田稻荷、山田家の墓石群が残されている。

安戸は、古くから秩父などへの交通の中継点であり、戦国時代にすでに町場が形成され市も立っていたという。争いが絶えなかった時代、腰越城と根小屋の侍たちと町人や農民たちとの関わりや暮らしが想像される。

(4) 安戸城跡

①沿革

安戸城は東秩父村唯一の中世城郭跡であり、武藏七党の一つである丹党大河原氏によって築かれた城である。応永 23 年(1416)上杉禪秀の乱により、丹党の大河原氏が衰退し松山城主上田朝直の所領となる。その後、戦国時代に数多く繰り広げられた松山城争奪合戦永禄 6 年(1563)の折、上田朝直の退路とされたところである。



安戸城跡の西方 600m 程の距離に

上田氏の菩提寺浄蓮寺があり、朝直、政宏(父)と長則(子)三代の墓所がある。

②城跡めぐり

小川町から県道 11 号線熊谷小川秩父線を西に向かい東秩父村に入る。楓川に架かる安戸橋を過ぎ、城山保育園の入口から施設に向かうように右折し、突き当たりが城跡の登り口である。道幅の狭い落ち葉の堆積した山道を進む。山の中腹あたりから勾配のきつい急坂になるが、20 分程で本郭に到着する。

安戸城跡は村の史跡に指定されており、200 坪程の狭く平坦な本郭は、登り口の道路と比高差 105m を測る。本郭を巡るように南から西の狭い平坦部分は腰郭の様相を示しているが、外側に切岸を伴っていないため腰郭とは考えにくい。本郭の南東と北側に堀切と思われる跡がわずかに残る。この城の構造で敵の襲撃を防御できたのが疑問であるが、「安戸城は物見の城か村の城」と言われている説がある。このため、浄蓮寺と腰越城との間に位置していることからも、周辺の地域を監視しやすい場所を選んで監視台の役割を果たしていた城と思わざるを得ない。

③城跡周辺

県道 11 号線熊谷小川秩父線を西の浄蓮寺方面に向かい、寺を過ぎて間もなく東秩父村和紙の里がある。移築復元した細川紙の紙すき家屋があり、紙すきの実演も行われている。また、併設されている道の駅には、ハイキングや農産物を購入する人々で賑わっている。



(5) 杉山城跡

杉山城の築城年代は定かでないが、戦国期城郭の最高傑作の一つとして高い評価を得ている。築城主については文献・記録が全く無いが、後北条氏とする説に無理があるというのは、城跡から 15 世紀の遺物が発掘されており、後北条氏の初代早雲が相模一国を抑えたのが永正 13 年(1516)であり、それ以前の武蔵侵入はありえないからである。武蔵の扇谷上杉の守護統治国であったことから、或いは築城の名手太田道灌の可能性も否定できないであろう。

①城跡めぐり

わたしたちが、杉山城跡を訪れたのは4月6日桜満開の日であった。古城には桜が似合う。

杉山城跡は、嵐山町の北部鎌倉街道を見下ろす丘陵の突端にあり、一見独立した丘の上といった風である。

この城は歴史の文献上には全く現れないが、縄張りの見事さと良好な保存状態から国指定史跡に登録されている。頂上の北に面した処に本郭を置き、それを取り囲んで十数個の郭がモザイク状に配置されている平山城である。本郭の北面は急斜面の人工の谷となっており、これをよじ登るのは手慣れの忍者でも難しかろうと誰かが言った。また、本郭から出土品も多く、焼けた壁下地(コマイ)・壁土が確認されている事から、それなりの建物があり城の広い範囲で火災があったようであるが、礎石や掘っ立て柱の穴などは確認されておらず、その焼失が戦火によるものとも判じ難い。

それから、腑に落ちないことが一つあった。頂上から3m程下がった処に「井戸跡」がある直径1m程の円形の穴と思われるが、巨大な岩石で塞がっており、その岩石の脇の縫みに水が溜まっていた。

その水溜まりは涸れたことがないという。だから井戸だろうという話しながら、保存会の方が残念

そうに語る。「重機で岩を動かせれば何かが解るはずなのですが、国指定史跡になっているためそれもできないのですよ」と語っていた。

そもそも丘陵の出っ張りの端に井戸など常識では考えにくい。



(6) 青鳥城跡

①沿革

青鳥城の築城年代は定かでないが城域は広大で、現在住宅地や産業地・畠地になっているので全貌を把握するのは難しい。わずかに残る郭の土壘の断片から推量すると東西 700m、南北 500m 程の規模を有し台地端、崖線上にある。尚、城域の東側は関越自動車道に切り取られているが、その東側に地元の人が「青沼」と呼ぶ沼がある。市指定文化財「虎御石」のある処だ。地元のお年寄りたちが「子供の頃よくここで泳いだものだ」と昔を懐かしがる。

青鳥城跡は、東松山市の南西部唐子地区(旧唐子村)にある。正式の地名は「石橋」だが、この界隈では「青鳥小学校」「青鳥自治会」など何かにつけて「青鳥」の名称が使われている。城跡から北西に 3km ほど離れた神戸地区に古刹「青鳥山妙昌寺」がある。第 42 世住職村井氏によると、当寺は弘安 4 年(1284)の創建(青鳥城主藤原利行)以来青鳥城の側にあったのが天正 18 年(1590)の戦火を避けるため現在地に移転したものだという。二の郭内に「正中」(鎌倉時代末期)の年号の板碑がある。これは妙昌寺との関係を物語るものではないだろうか。

②青鳥判官藤原恒儀についての考察

羽尾神社(滑川町)の由緒書き(説明板)に祭神として「青鳥判官藤原恒儀」(829 卒)の名前が見える。藤原恒儀青鳥城主説には多くの研究者が否定的であるが、以下のようにも考えられる。

「判官」とは律令制の「国司の第三位・尉」であり、9 世紀初頭はまだ律令制が十分に機能していたと考えられる。国司は本来国府(府中市)にいるのだが当地は遠隔地であるので分所として国衙(政庁)が設置されていたのではないか。つまり「武藏国府青鳥分所」である。このように、青鳥城は国衙から始まり世情が不安定になって城郭に変質していったものと考えられる。



(7) 熊井城跡

①立地

熊井城跡は、鳩川上流域左岸の丘陵上、妙光寺の裏手に立地している。現在は館を区画する堀とも考えられる浅いくぼみが一部残されているのみで、その性格を含め詳細は不明である。「武藏国郡村誌」によると「東西約 216m、南北約 108m の二重に巡る堀が残されており、かつて熊井太郎忠基の館があった」と記されていた。

熊井太郎忠基は源平合戦で源義経に従い活躍した武士の一人である。

②熊井氏と熊井城

熊井氏は、鎌倉時代初期の人物として熊井太郎忠基が源義経の従者として文献(源平盛衰記)に登場し、次は南北朝時代の熊井五郎左衛門尉政成が、室町幕府の内乱である觀応の擾乱(1350～1352)や、関連の合戦に登場する。

妙光寺の裏山は熊井城と呼ばれている城であってもこの時代は柵の延長で「城(き)」と呼ぶべき「熊井城(くまいのき)」の段階である。

熊井山妙光寺住職のご母堂の談話によれば、当寺の創建は 1264 年。当寺を含めて裏の山全体が城域であった。城主は熊井太郎忠基、源義経の配下だった。義経が頼朝に追わされて陸奥に逃げるとき武者姿では具合悪かろうと、一行は鎧兜を投げ捨て修驗者の姿で落ち延びていった。寺の西側の奥に鎧塚・兜塚がありずっと祀ってあったが、いつのころか西方の黒石神社に合祀された。「義経はその後平泉で亡くなつたということであるが、熊井太郎はどうなつたのであろうか?」と尋ねると、ご母堂曰く「生きて帰ってきたんでしょうね」ということだった。

城域は独立した山で北側は絶壁、下は湿地帯になっている。山中には空堀らしい跡もあり一応城郭の呈をなしてはいるが、疑問は残る。

疑問 1 平安時代末期、当地に山城を必要とする戦などあったのだろうか。



妙光寺裏手 熊井城跡



鳩山町多世代活動センター資料室より

疑問2 築城が室町～戦国時代だった(鎌倉時代は考えられない)としても、あまりにも造りがお粗末すぎる。

疑問3 義経に関する話は歌舞伎の「勧進帳」を模倣したもののような気がする。

(8) 養竹院

①沿革

養竹院は、太田道灌(1432～1486)の陣屋跡に道灌の菩提を弔うために建てられた寺院(明応年間 1492～1501)と伝わっている。寺院の名が甥で養子の太田資家の法名であることから、資家の菩提を弔うためのものとする説もあるがはっきりしていることは、太田家の菩提を弔うために建てられたということである。寺の開山も資家の叔父(道灌の弟)で叔悦禅懇禅師である。

国道 254 号線から川島町に入り、豊かな田園地帯で穀倉の町の様子が伺え、道を入るとすぐに大本山円覚寺百觀音靈場三十九番札所の養竹院に到着する。門前の臨済宗円覚寺派「常樂山養竹禪院」の石柱が目に入る。門の右手前には水堀と思われる堀が現存しており、その堀の手前に「太田道灌の陣屋跡」と刻まれた小さな碑がある。

堀は寺院の前面である南側から西側を巡り、北側の水路に続いている。この堀と水路がかつての陣屋の敷地を示しているのではと考えられている。しかし、武藏国城館カード第五号の養竹院－太田道灌陣屋跡－「養竹院境内図」では、寺院本堂の南側に池と思われる水場が描かれているが、絵図からは寺の周囲を巡っている堀状の遺構が確認できることから、現存する堀や水路が陣屋の敷地を現しているか疑問である。

門前の左手には板碑が 8 基確認できるが、14 世紀後半の年号が刻まれており、



養竹院境内図



堀・水路跡



太田道灌陣屋跡



板碑

道灌との関連性は見られない。

門をくぐると右手前に寺額「千手觀世音」と記載のある觀音堂があり、奥に本堂が見える。本堂は、庫裡を兼ねているような佇まいである。境内には、鐘楼と垂糸桜(別名：糸桜)があり、徳川家光公鷹狩りの際に立寄った折、当時の垂糸桜の見事さに歌を残したと言われている。

現在はその風格が感じられないが、歴史があり文化財が残る由緒ある寺院である。

②太田道灌

室町時代後期に関東地方で活躍した武将である。また、築城の名手としても知られており江戸城をはじめとして河越城や岩付城を手掛けたことも知られている。

このように、城を築く技術や享徳の乱や長尾景春の乱を平定する等の兵の扱いに優れていた。一方、歌をたしなむなど文武両道に秀でた人物であり関東各地に数多くの伝説・逸話が残っている。有名な逸話に山吹の花がある。俄雨に遭い蓑を借りようと民家に入ったところ、出てきた娘が何も言わずに山吹の花の一枝を差し出した。その時道灌はその無礼さに怒って出て行ったが、後日ある賢者に「七重八重花は咲けども山吹の実(蓑)一つだになきぞ悲しき」という和歌の意を諭されて大いに己の無知を恥じたということだ。

(9) 山田城跡

①沿革

山田城跡は国営武藏丘陵森林公園の中にあり、造園時に発見され、発掘調査は全く行われていないという。案内板には「築年代は不明ですが忍の成田氏の被官、小高大和守父子及び贊田摂津守等が居住し・・天正18年(1590)豊臣秀吉の小田原攻めの際、前田利家によって陥落したと言われています」と書かれている。

成田氏は山内上杉家の家臣として仕えていた。戦国時代比企地方でも関東の霸権争いが展開され、多数の城砦が構築されたという。山田城は戦略的なネットワークの一翼担つて松山城の出城の一つとしてつくられたとの伝えもあるという。因みに現在、贊田姓は全国でも埼玉県が半分以上をしめ、中でも滑川町に一番多



山田城跡案内看板



古鎌倉街道 (右側に立て看板)

く、小高姓は関東4県に多いが中でも神奈川県に次いで埼玉県に多い。

②立地

国営武蔵丘陵森林公園は独立丘陵にあり、南北4km、東西1km、面積304万km²で東京ドーム65個分の規模である。公園(丘陵)の南端に山田城跡がある。長径140m、短径100mの郭内部を土塁と空堀で4分割し堀と土塁を橿円形に一巡させた単純な造りとなっている。北東部に虎口があり古鎌倉街道の標識がある小道に接している。

③城めぐり

公園内を山田城から古鎌倉街道の標識を進むと、山田城跡と隣接するように山崎城跡がある。また、公園外の県道250号線をはさんで東側には谷(やつ)城跡がある。これらの城については記録も伝承も残っていない。いずれも戦国時代の城跡とされる。時代差はあるとしてもせまい区域に三つの城郭跡があるということは当時の世情やこの地の重要性を想像することができる。戦国の時代、成田氏配下の城として、あるいは松山城の出城としての守りを固め、この地の人々の生活を守っていたのだろう。

公園内には古鎌倉街道の標識がいくつか立っていて鎌倉街道が通っていたとされるが、丘陵地にあえて主要な街道を作らなくても丘陵の下の平坦な所を通ればよいだろう。森林公園の中には古い時代からつくられた沼(今も地元の人が管理して使われている沼もある)や古墳がたくさんある。今は木々に埋もれてしまっているが確かににぎやかな人々の暮らしがあり、そのような人々の縦横に張り巡らされた生活道路だったと考えられないだろうか。

(10) 小倉城跡

①立地・縄張り

小川町を貫通して南下する槐川が、嵐山町に入る処で「天狗の鼻」のような丘陵の出っ張りにぶつかり、流れを直角に東に曲げ、その鼻の頭をなでるように進み、鼻のてっぺんで向きを西に変える。その鼻のつけ根に小倉城跡がある。城の北・東・南の三方が槐川という天然の「堀」に囲まれた格好だ。

小倉城は比高70mの山城で、五つの郭でなっている。虎口周辺など隨所に石積みが施されているのが特徴だ。石積み自体は古代から見られる(ex 金田城)ので格別画期的ではないが比企地方では他に例がない。山がたまたま岩(緑泥石片岩)で出来ていたからなのだろう。



小倉城跡の石積(緑泥石片岩)



南側の土塁の上に立つと、前方大平山の西側に「菅谷館」「松山城」「青鳥城」の場所がすっぽり視野に入る。この構図から城同士のネットワークが読み取れる。

また、尾根伝いの西に「青山城」跡があることも見逃せない。

②城主考

小倉山の麓に、山にへばりつくかのよう一棟の建物がある。小倉城の真下に当たる処で城への登り口になっている。この建物は「延命寺大福寺」と称し、旧下青鳥村淨光寺の末寺となっているらしいが、住職も居ず世の中から忘れ去られた呈だ。

しかし、この寺所有の位牌がときがわ町の指定文化財になっていた。その銘は

「遠山衛門大夫藤原光景室葦園位牌」とあり、「遠山光景の妻の位牌」ということだ。小倉山のすぐ東南に旧遠山村(現

嵐山町)がある。「新編武蔵風土記稿」によれば、小倉に城跡があつて「遠山衛門大夫藤原光景が居城なりと云・・(中略)・・天正15年(1587)五月卒せし人なれば・・」とある。また「遠山寺」の寺伝によれば、小倉城は永正2年(1505)遠山光景の創建となっており、その二人の「光景」が同一人物かどうかの問題が残るもの、次のことが推理される。

遠山氏は元々扇谷上杉氏の家臣であったが、松山城の上田氏同様に扇谷上杉滅亡後小田原北条氏に主君を鞍替えしたのではなかつたか。「小田原衆所領役帳」に遠山姓が見られるのもそのためである。

以上の状況により、小倉城の築城主及び城主は遠山氏(上田氏ではない)と考えたい。

蛇足ながら、ご存知「遠山の金さん」こと江戸時代の北町奉行、遠山金四郎景元のご先祖がこの遠山氏という説もあるようである。



延命山大福寺

5. おわりに

冒頭に申し上げたとおり、わたしたちは地元比企郡をよく識るために中世の城館跡巡りを楽しもうとしたのであったが、その成果はどうだったであろうか。

城館跡の研究という面では、確かな資料や文献がほとんどない中で、素人集団が首を突っ込んでも、結果は初めから見えていた。それでも、本文「松山城」「青鳥城」その他の条で従来の「定説」に対していくつかの疑問や問題点を指摘できたことはひとつの成果とみていいのではないだろうか。例えば、「松山城」では天正18年の戦闘はなかったと結論づけた。これは松山城愛好家のご期待に冷水を浴びせたかもしれないが、歴史を冷徹に見つめたつもりである。

当地比企地方は16世紀前半から小田原後北条氏の支配下にあって、その防御態勢は松山城を拠点として多くの城塞から成っていたが、その戦記は天正18年の

「小田原征伐」抜きには語られない。だから否が応でも視点は松山城に向けられるわけであるが、その肝心の松山城の抗戦が真しやかに語られる巷間の伝承とは裏腹に実に曖昧模糊としたものであった。それを取り巻く支城においては猶更である。こうした状況の中で「前田家先祖書由緒之覚」に出会ったことは大きかった。これは「小倉城」関連で訪問した、ときがわ町の職員さんに紹介された『有史芳』(地元研究誌)の一史料だったのだ。けれども、これで全てが解明できたなどとは考えていないことを付記する。

また研究活動の反省点もある。結果論になるが、研究対象をもっと絞り込む必要があったのではなかったか。共同作業が週一回という時間的制約の下で、10カ所の対象件数には無理があったといえる。だから、各所において重大な見落としがあったことを否めず反省する次第である。また、記事を書く作業を分担制としたが、例えば熊井城や養竹院など題材・話題が皆無に等しい城館跡を担当したメンバーの苦慮がしのばれる。

しかし、ごく限られた時間の中でメンバー全員が、時に和気藹々と時に侃々諤々と報告書作りに励んだこと、これは望外の喜びで今後メンバーの記憶に残ることだろう。

近年、松山城跡・菅谷城跡・杉山城跡・小倉城跡が国指定文化財となった。これを機に当地方の城跡の発掘研究が進展することを期待するものである。

なお巻末に、今後の研究者のために、「比企郡の城館跡一覧表」を添付する。

『参考にした史料文献。施設。ご協力いただいた方々』

○市史編さん課 1985「東松山市の歴史」 東松山市

○梅沢太久夫 1980「東松山市・比企郡市の各城館跡」



新人物往来社 「比企郡の城館跡一覧表」

○梅沢太久夫・内田康夫 1990 「武蔵腰越城」腰越城跡保存会

○梅沢太久夫 2011 「改訂版武蔵松山城主上田氏」まつやま書房

○梅沢太久夫 2012 「松山城合戦」戦国合戦の嘘と実を探る まつやま書房

- 梅沢太久夫 2024 埼玉の城「127城の歴史と縄張り改訂版」まつやま書房
- 滑川村企画財政課 1984 「滑川村史」通史編・民俗編 滑川村
- 小野義信 1984 「滑川村史」比企郡滑川村
- 高柳 茂 1989 「滑川町の中世城館跡」『研究紀要』埼玉県立桶川高等学校
- 文化財分室 鳩山町多世代活動センター2F
- 文化財保護・町史担当 鳩山町教育事務局
- ボランティアガイド様 埼玉県立嵐山町史跡の博物館
- 吉見町教育員会 松山城 埼玉県立嵐山町史跡の博物館
- 嵐山町教育員会 杉山城 埼玉県立嵐山町史跡の博物館
- ときがわ町教育員会 小倉城 埼玉県立嵐山町史跡の博物館
- 埼玉県立嵐山町史跡の博物館 2023 国指定史跡 比企城館跡群ガイド
- 川島町 悠々の歴史を訪ねて ふるさとの文化財
- 比企地区文化財振興協議会・鳩山町教育員会
- 腰越城跡保存会編集発行 1990 「武藏腰越城」
- 歴史スポット探究会様
- 西吉見郷土史
- 臨済宗円覚寺派「常楽山養竹禪院」ガイドブック
- 熊井太郎忠基関係資料
 - 1 誠文堂新光社刊 1938 「源平盛衰記」校証日本大学大系本
 - 2 岩波書店刊 1999 「平家物語」日本古典文学大系本
- 「新編武藏風土記稿」第191巻(比企郡の条)
- 熊井山妙光寺住職のご母堂様
- 青鳥山妙昌寺第42世住職様
- 産経新聞 2025 「山城ガールむつみ埼玉のお城出陣のススメ腰越城」
- 小川町教育員会 リーフレット「埼玉県指定史跡 腰越城跡」
- 西野博道 2005 「歴史ロマン埼玉の城址30選」埼玉新聞社
- 嵐山町WEB博物誌「城と合戦」
- 嵐山町ホームページ「国指定史跡 菅谷館跡」・「平澤寺」
- 埼玉県立嵐山史跡の博物館ガイドブック1
 - 2023 「菅谷館の主 畠山重忠」
- 埼玉県立嵐山史跡の博物館ガイドブック2
 - 2022 「国指定史跡、比企城館跡群 菅谷館跡」
- 埼玉県立嵐山史跡の博物館ガイドブック3
 - 2020 「秩父の歴史」
- 埼玉県立嵐山史跡・比企地区各市町村教育員会編 リーフレット「菅谷館跡」
- 埼玉県立嵐山史跡の博物館 見て歩きガイドマップ「比企城館跡群 菅谷館跡」
- 埼玉教育員会 「埼玉の中世城館跡」1988 埼玉県立歴史資料館編